# 新局玉石童子訓

巻十四

1279
29

村田
1279
29

# 新局玉石童子訓巻之十四

東都　曲亭主人口授編次

## 第四十四回

因果覿面囊金故主ハ復る
宿緣不空孤孀舊家ハ寓る

阿夏の老母ハ吾足齋の舊恩忸怩悔の顛末を聞くハ惑ひハ晴るゝ。
霽れ涙の夜の雨袖のみ濡るゝ術なを思ひ復〳〵。喃咱伏今ぢめて
知る金子のゝ。然わるべ〳〵と思ひもよらぬ只朱之丞をのみ試難て。拘神の
にぐる実を引裂棄〳〵心裡恥く付るゝ。是ハ就ても痛〳〵親の双ハ身
を果〳〵る。晩稲ハ素より行状ハ兎毛ばかりも疵ハるゝ心操さへ縹致さへ。
美〳〵過ぎて陽炎の命短くあるべしと思ひ過〳〵ハ親の愚癡富も栄ん皆
ゞを。神ハ佛ハ願言の果ハ歎ぎの杜とる。実子よりもいとをしさの千万

寸穂の繁薄招く甲斐なき魂招ひ。くるぞ〳〵別路は親の因果の子は報ふ例ありとも知られば親さへ子さへ同じ夜は誓の垂氷の剣太刀身を殺しぬる哀れさよとゝど答へ亡骸を揺動して繰る〳〵倭文の苧環今茲は輪々て因果覿面昔阿夏ゞト向し彼神トの讖文は子而非子非親是親とあり〳〵晩稲朱之丈等の上るぞや。と思ひ惑ふ無明の醉のまゞ醒ぬ婦女子心ふとり乱して外着忘れ詩言を。津向屋主僕い慰難て愀然る斗が中は深疾は屈せぬ五足齋は頭を抬げ眼を睜りてやよや老苧愚癡をなひて俺隠慝の報ひを思へば晩稲の横死も歎くは由なし。然るとも往る六月某の夜は途は財嚢を争ひ〳〵彼両箇の少年は何等の人ぞあるらん。倘命あり時あらば送ふ名告逢ふ日のあらバ。俺這首級を授んは朝を俟て消てゆく。露の玉の緒絶るん折は。稍本然の善は返る讖悔は我なゞ。無益はとゞ。吻く息さへは苦げるを楽六は遠〳〵金九郎は掛る索の端を拄は結び止めて我と吾足齋はうち向ひてさてはふぞ。ぞ〳〵辛踏生斯の我は浪華より。大江杜四郎成勝は相従ふて武者修行の為這地は来る。峯張楽六郎運能是と目今和老の讖悔を〳〵彼夜一百九十五金の財嚢を含る復さんとて連りは挑を爭ふる。其一人は我楽六ぞ。件の財嚢を捉られとて後方遥は投遣りる。其一人は別人るぞ。和老の渾家阿夏刀自の実子とゝはゝる。末朱之丈晴賢とゞ思はるん。苦痛を忍びて聴れ〳〵。件の一義は菌様々々。云云の情由ありとて。落葉の媼ゞ朱之丈の為は慈善の事の顛末。又彼一百九十五両の金の来歴をとゞめぞ楽六の兄十三屋九四郎の義侠のゆ。當日朱之丈が東

路へ追放せらるを憐とて楽六をして金五両を贈らせんとて追せ〜るゆへの
宵十三屋の掛店ゆへ落葉の媼の悲泣の折朱之丞がかり来て裏面へ
入らで窺聞あり。其頭ゆ措き〜財嚢の金を偷盗て走るをり楽六も亦
ゐて来て朱之丞の不義の為体を既ゆ窺知りこれぞ跡を跟つ曖路ゆ朱之
丞と力戦〜て投懲〜蹂躙りて九四郎の取らせよとのゆへ〜金五両を投與へて
財嚢を索盗抗て十三屋へ帰てゐりて落葉の媼ゆ渡さ〜ゆ孰ら知るべき財嚢
の内ゐる二重裏の金ゆ金ゆゑ両箇の小石さければ人々疑惑せざるもなし。就中我
疎忽をらひ解よ〜のわゝとゐければ兄九四郎の贖ふて其内中ゐる金百両を
落葉の媼ゆ返さ〜らべ後安ゆ似たれども其疑ひゆ我もらも今ゆ解よ〜ゐり
〜ゆ原来彼折財嚢の金を奪ゐて小石を入易〜ゆ延明和尚であるとい
られて驚く吾足齋寔ゆ然とぞりゆ。阿夏の老尼も共侶ゆ羞て頭を低

て居り。當下杜四郎成勝ハ石見ゆ会釈して我を生ず老尼ゆ向ひて。
喃阿夏の老尼とゆゑ俺又楽六の舌ゆ代りて驚ゐ〜ゐ一話あり。和女郎の前
夫と呼ゑ〜末松木偶ゆの実女ひ柚の小夏ハ手九歳の秋磨鋏嶺の賊難ゆ。
千仭の深谷へ投降されて死をべり〜を神佛の冥助ゆよりさりけん俺為ゆ
外祖父ゐる峯張九四蔵ゆ救ひ合られて其名をひ藝と喚更られ成長ゐる後
九四郎と夫婦ゆ成りて今も猶住吉の里の宿所ゆ在り。折ゆ觸きてハ父木偶ゆ
と和女郎の寔さいひ〜そうち歎ゆた其孝順を知るべのゆ況
落葉ハ木偶ゆ離別せられて再嫁らぎ和女郎を怨る心ゐゆハ世ゆ稀ゐる
べゆ貞女ゐるべや其母女児の孝貞実義を天道憐みのひけん近曾住吉の十
三屋ゐゆ母女再會の歓びあり。それゆハ異ゐる和女郎の為命所生の獨子朱
之丞ハ性猛悪ゐれば孝ゐるべ反て二箇の螟蛉女小夏と云晩稲と云性美

〳〵孝順なるも。一箇は逆路に生別して年歴ぬれども。再會はよし〳〵。一箇はまた〳〵陸奥より。養父母に従ふて這地に来る甲斐もなく。親の死に命を隕せり。現に善悪応報の遅速あり。速なは彼身に報ふべく。遅なは子孫に報ふぬべし〳〵。天理彰々。誣べからざる。と説きて老芋は羨慙とて。黙然うること半晌許。純に貌を更めて原来小夏は恙なく。花洛に遠うゝぬ浪華の月の十三屋に在りとぞ嬉しけれ。浮世の儘にあるべき。恥を忍びて見まくわ。そも許されぬ者なれば。欲得ならぬ托る。聲ゆゑに庭の樹下に立在りける一箇の旅客。忽地に聲を被て然なる不樂のひと阿夏女郎。俺今對面をべけまでのひつ檐廊にうち登りて。躾て坐席に找を入れば人咸驚怪をる。斉が中に四郎柴六。訝りなぶる其人を見るべば是別人なるべ。十三屋九四郎〳〵国衣の儘に細帯して。逆旅中刀を佩りけ。思ひ



ぶけるに對面なれば。こはいかに。と驚ぬ。遠〳〵席を譲る。九四郎急に推禁めて。和子はいかに〳〵恙なきぞや。柴六なるぞ。高嶋主の禮稟さんを須臾の宵免を蒙りて先急ぐべきなれ。とのひつ老芋にうち向ひて。喃阿夏の老芋刀自とやらん。目今和女郎のいつまとる。小夏の乙藝の良人なる。姓は峯張屋號は十三浪華で侠者一頭なる。九四郎は即俺と大江脇子に急要あれば京の麗舎を渉猟書して。這近江路にとゆゑ〳〵ゝ迎を追つ。今日未後に。這里の隣りの津向屋を宿にして。扨城内の消息を問搦るに。大江峯張両少年は。城内なる高嶋主許止宿の。并に衆少年の試撃の。和女郎の実子朱之介の。和女郎の茲に在ることを。知る人ありて告〳〵べ。明日は風やゝ這那を訪はやと思ひつ。長途の疲労を憩へて在り〳〵。思ひ設けるに今宵の恩劇。其名ぞ高へ豫知る。和女郎の上

を心許なく思へども措きがたくして宿の主人の尻に跟いて自餘の客人共伯に庭門まで来かけるに内に入らんいさぎよめて那里に立て在り〳〵程吾足老の懺悔の條々又朱之介の西心事の顛末這盆九郎とやんのるまでも心とも〳〵知り〳〵り就中感じ思ふに辛踏生の懺悔に人臨終に舊悪をよく懺悔する者は五逆十悪心の罪戻も都て消滅せざることなく必成佛とべし〳〵と云ふ佛説に然るゆゑ〳〵懺悔のまして或は偷を或は人の東西を借て返さずして命終らば彼身に益ありとは云ふとも是其人に損あり然て真の成佛とは云ふべからず就て我那里の樹下に在り〳〵時月明に向て見て知りぬ那檐廊の柱に吊りて正に一箇の財嚢あり我憶ふに那財嚢は朱之介が偷て来て庭より出て逃去る時憶ひぞ柱の肱鎖に件の財嚢を掛止めて心とも〳〵なくを故ちけん立戻りて食る違ひけるに那身は蚤く逃亡て財嚢は柱に遺り〳〵るを。

俺這推量的中〳〵て辛踏生の懺悔虚言なく〳〵財嚢中に有べき金の一百九十五両ある欤不足ある欤知らねども其當初を推時は這春大和の上市なる落葉の刀自が朱之介に沙金と唐布を買せんと齎〳〵る金子なるべし辛踏生先非を勸解て本主なる落葉の刀自に其金子餘波なく返し給べ是も真の懺悔なれ幸に盗賊の悪名を削らるべし。這議甚麼と譚るを吾足齋も〳〵とうふけん頭を拾げ眼を閉て九四郎を見て片目を抗て戰〳〵うち拜て通れ愛〳〵裁判なる哉幸に那財嚢の金は朱之介のまに渡らで捉遺されしを欲びなるべし。やとや老芋疾々とくに老芋は応をして得に羞て立難るを津問屋集三郎在て身を起〳〵檐廊に件の財嚢を食る時猶庭の樹下に立在る男女三名在り集三郎を透〳〵見て客人達其首は寒〳〵毋屋に登らせる公はと呼て先其財

嚢の金を九四郎に呈されば九四郎敢自由にせず。汝が儘老苧に渡させ云云と宣示せば老苧は辭ずことを得ざる。件の財嚢を解披して内なる圓金を金牢紙に封じて二裏あり。其一裏は圓金百枚又一裏は九十五枚あり。九四郎是を見て又吾足齋に向ひて曰ふ。辛踏生俺云云と論ずるも強て和老を窘めて金を返せとのゆへあるぞ。和郎の意衷甚麼ぞや。と問ふを吾足齋ゆへあるべしとの然ることあらん。返却は已ぶ情願と宜しく計ひのひねとの九四郎領して件の圓金二裏を含まて財嚢に斂る折から。庭の方より咳して入り来る男女二三名あり。阿夏の老苧は訝りて。誰也と問ひつゝ見るれば是則別人なるべし。福富村なる阿鍵小忠二又九四郎の乾児なる。四揔名まで出て来る。主客亦這問答に憶ず時を移す程に星の光りも弥寒く曉天にぞなりにける。小程に末朱之伏晴賢は今宵脱路を失ひて只得泪井に身



を躍る。逃もあらば逃去らんと。悄地に念じてありける。其頭の庭の樹下に人二三名立在て久しくなるまで心ともなく母屋なる主客の問答を洩聞くに盆九郎は杜四郎米六等に搦捕まとしるに晩稲の横死吾足齋は深痍を負て戦悔の條々思ひ切なる九四郎さへ樹下より立出て團坐に入りて議論の趣意表に出ざるなく又彼財嚢にありける金は往る夏の夜吾足齋に奪ふて小石の梁上に栄六に抓せたる神出鬼没の機関を今やうやく暁ぬて天魔を欺くに人も且驚き且呆て醉るが如く醒るが如く。悶然として有りける程に長き冬の夜時移りて早暁天にぞなりしかば心弥安らかぞ。天も明ば見出されて倩も亦盆九の如く搦捕られて牽出せん。いかにせばと思難て頭を擡げ又隠れたる木偶の拮掉たるに似て苦心限りもなかりしに彼樹下にありける人の

銑鋺を飛して
朱之丞命を免る
九四郎
おいそ
おりく四郎
おりく

朱之丞
おく六
小忠二

やうやく生ぜ母屋に入るを月明に窺ひ見るとなく。めに立ちしへ九四郎ゆく。
其後ろ八阿鍵小忠二浪華の四捻者ありけるに朱之丞ハ又驚死て舌を吐
紀頭を拭つ。猶も四下を窺ふに庭の人のあらびありて既に便を伺てけるに
井桁に閃りとまを掛て潜び出つ塀裏の松を階子に攀登りて塀を踰
まくまるる程に楽六又蛇く佶と見て那朱之丞ぶと叫びも果ぜ刀を引提て擔
廊へ出るを見久る朱之丞ハ袖に准備の席工鉞を含まるま尖く丁と擲つ然
も修練の銑鋭に楽六嘔ぶ身を反し七刀の柄に受留る程にもあらび朱之
丞ハ身を跳らして外面へ忽地撞と飛下りて往方も知らびありけるを楽六も猶
追んと背門投て出まくるを九四郎急に喚禁めて已ねく。開ハ要る人の
数記もあるべに掛捕て何にせんとらべ杜四郎も俱にあらず。現窮冠ハ逐ふ
彼が偷を見ぎりける。財嚢の金ハ茲に在り。之を追ふと欲と諫られば楽



六僅に点頭て故の席に入りて居り。當下九四郎ハ石見丞ふうち向ひて。
高嶋主倫身総角ゆゑ久しく打絶けるに斯荒々に為体ゆゑ。
物稟えハ無礼なれども詰まり一義あり這金二百九十五両ハ目今ぬれ
情由なれば五吾足齋のまより受合て落葉の媼に返さとす。けうあるね
るるぬぐ。一旦偷ぶ合られしより早五ヶ月を歴しに這義を守へ告訴る
せで我私に和睦せば後のぬえも影護くて快らざる所あり。今訴ん欲訟ぜ
ん欲。這義を教のれと問ふを石見丞ぬあ否告訴のるハ然るべ辛
踏ぶ新に罪を謝して返さ金子なれば不正不良の財めあらび然
を慈に守の憲断に被る時ハ事ぬ
で盗賊の罪免るべ鄙言ぬ
くに過て玉を砕く。鯁直も亦時に由るべ。這義を思ひぬやと説

まて九四郎再議に及ばず。更に老芋にうち向ひて。喃阿夏刀自定めし和女郎の落命なる。今より孤獨の人となるべ。何人欲よく養ん昔俺刑婦小夏のひ藝ぶ。受て養育の恩を思へば。今這金子の半分を折て贈らまゐ。しかるあるべからん。這金は俺金なるを自由にせば。彼微生高が醯を乞れて。其隣なる醯を乞ふて人に與さりとのゆに似さるべし。他の物もて已を飾る。似而非仁義は俺要せず。這義は俺亦主張あり。異日又復談ずべし。とのられて老芋は跳然として頭を拾げて答ていう。昔小夏の五歳の比より。九歳に至る秋の比まで五稔母と喚まて。親甲斐もなく倒々に彼ゆへ河原撑ぎをさせて養れ日の多くに養育の恩云々と宣ることを恥じれと勸解を九四郎推禁めて無益の口誼に天は明るん俺へ旅宿へ退るべし。和子と共六ゆ要事あれども這黒めて磬をぶにあるべ明日芳館へ推参せん自餘の人達心を

屬てのぞ夫婦の為に商量敵に告別ぶ財震の人金を。合て懐へ楚と挾めて四揔を倶して遽しく。津問屋へ走り去りしかば石見收も卒退んとて杜四郎等をいそぶ。刀を衝立て身を起せば采六ゆ盃九郎に掛る索を食除て。倶に玄関より出去る時集三主僕に主人に代りて門内までぞ送りける。浩處に高嶋の若黨奴隷に常に異なる主のくさの。最遅けれども措まぞ。真夜中より迎に出て東西とく索托ぶ。料らぞも今。辛踏の門前を過る程に主僕迭に挑燈の花號を早く見せしく。走り集ひ云云と告も言も示して石見收に盗見盃九を伴ふるに牽せる。四郎采六共倡に城内なる宿所へ入りゆく程に。鴉の茂林を離る。聲して天は耿々と明けり。然る程に辛踏の宿所ゆ麦客やうやく立去りて是より暇ありければ集三主僕小忠三さ倶に老芋を資げつ。

先晩稲の亡骸を小室に卧者て挽屏風を建るも果敢なし。又吾足斎い衰果て湯薬も呑む降らねば。開が儘蒲團を布儲けて小横をうち被るのみ術もなし。當下老芦ハ阿鍵小忠二を上坐に請迎て火掃に炭を接ぎいふやう。別れまつりしより年許多音耗絶て佇りしハ俺身陸奥へ伴まして後夫に従つゝ然るを亦故ありて去歳の冬より這地に来てまゝ住熟ぬ宿なれば。知らせまつるに暇なく。本意ゆもあらぬ佇りしハ。ふん身ハ又何等の故に這頭に逗留しぬゆゑん況今宵の凶変を夢にも知られて訪まつる。有ゞ記まで忝く再會にて佇るゝ。嚮ハ主客ともに紛れて何宜せしゆゑん。逆上せたのみなりしゆゑ漏しぬる鈍まし。さよ無礼を饒しのひねと勸解まゝ阿鍵ハ嗟嘆して。故ありゆを思惟れば世ハ夢なるぞとハ者なり。奴家が今の為体ハ珠刀祢に嘗体ハ珠刀祢にまつらんん。然るを亦思ひ寄らぬ。陳



田のつゝみより。有司達より凶下知あり。猛可に奴に小忠二を召よせ。ひしゝゝ福富村の店舗ハ措名と丁太郎に任用して四五日前に這地に来つ。津問屋を宿にしてあるゝれば昨日ん身ハ背門の方へ出のひしを見ぬ。ものいひやと思ひしゝゝ。珠刀祢も同居ぬと小忠二のいふより。まゝ訪もせで在りけゝ。脇の潰れし夜中の凶変。らも措まゝ。主人の後に跟いて来ハける甲斐もなく。かゝる歎ぎを見ることのうれしさと涙噴む。脆き女子の袖の雨外の時雨も寒げなる。小忠二も共にいふやう。珠刀祢ハ何といふ。嚮ハ那子に訪まゝ後幾程もなく悪瘡の病悩を豫知りなゝ。断りいて遣しに黄金の岳父船積氏ハ憚ハ。珠刀祢の放蕩無頼ハ。敵まゝなる者なれども然まゝ。珠刀祢の落魄に行遭なゝ。何でハ難面くものせんや。銭帛にも心ハまつるまゝ故分の在さゞ

とて。隔てなき思ひのほどを。慰められて又袖濡を。老芦い瞼を推拭ふて。俺
子のごとく良人を。心ゝ〻不軌の顛末を。知られしごゝ面目なふ昔熟識と
思召せ。御好意あを有ごけれ。といふ間ふ窓より走りて。鴉の聲して
けきとば。津向屋主僕ハ這古変を。疾里正ふ告んとて。庭門より出て
めぐ〜ゝば。阿鍵小忠二い开ゲ儘ふ。阿夏の老芦を慰めて。捜使の
来ゐるを俟ゐるべし。介程ふ里正故老五保等ハ津向屋集三の告ゐ
ふより。吾足齋の宿所ふ来て老芦のゐ所を問定め。躯て一紙の訴状を相
捧げて城内ゐ有司ふ訴えあげゝば是日未牌ごりふ。実検使到来しく。
吾足齋と其妻老芦の稟を所を聴定め。且晩捕の亡骸を展検して。
口状一通を筆録。但し吾足齋ハ深痍ふて既ふ命危ふければ其妻老
芦と隣人津向屋集三等を相俱して。城内ふゝり来ハ頭入一口鬼太夫

安倍ふ事云云と告ゝば。躯て老芦集三等を。局内ふ召よせて。
鬼大夫みづゝ〻鞠問を。小るふ辛踏吾足齋ふ。深痍を負せゝり
ける。盗児盆九郎ハ昨霄大江杜四郎等ふ搦捕まゝを高嶋石見守
の訴ふより。既ふ獄牢ふ繋ぎ置ゝれば見太夫隠所駿兵ふ課て。盆九
郎を牽出させて。事の虚実を拷問せるふ。盆九郎が悪事の條々。
嚮ふ大江杜四郎の刀子を偷ゝるを始ふて。昨日吾足齋の乾児ゐる。末
朱之丞ふ諜合されて更闘て。俱ふ吾足齋の宿所ふ潜入りゝる。朱之丞
い親の金子を偷と食まゝ欲して果さず早く逃亡ゝ。又盆九郎ハ。吾
足齋の頓蛉女。晩稲を豪奪ゝ。走り去らまく。ゐる折。吾足齋ゐ来
て。謬て晩稲を残害ゝ。反て盆九郎ふ。服腹を刺れて仆ゝる。其際ふ盆
九郎ハ逃て門外ふ出て折。石見守の客ゝとゐる。大江杜四郎。峯張米六郎

ら等ふ捕捕まえてうとふ首伏分明ありけるに鬼交則諏訪さらく今
盆九郎の招ふ招ふ吾足齋ふ思ふ其乾児なる朱之
水を走らせさらに等困ふ似くり。但し吾足齋ハ深疾ゆて命危ふしと
いへ津向屋集三里正等女房老苧を相資けて朱之水の往方を渉猟て
将て参るべしと宣ふしそ是日の聽ハ果ふけり。然ば老苧ハ里正故老津向
屋集三等と共ふ退りて宿所ふ帰り来ぬれば是日の留守を憑とする福
富小忠二阿鍵等ハ遠く立迎て事云云と告るをゆくふ吾足齋ハ
仙丹の奇效も茲ふ竭れけん。鬻ふ老苧等ぶ生ゆ後幾程もなく
面色変りて忽然と息絶うとふ豫期しるるぶ。老苧ハ孤孫の林ふ
離と實鴈の對を喪ひ心地しそ今さらふせん術を知らぬ扶あるべふ
あらざれば里正故老等ハ又公問所へ走参りて吾足齋の死けるを訴



禀そふ重て実検使を下さふ及ぶ女児晩稲の亡骸と兵侶ふ随意
安置くべしと命ぜる是ふより小忠二集三等相資けて吾足晩稲父
女の柩を程遠き山院へ送遣して當晩茶毘の煙と做る線ふ二塊
の土饅頭ふ表識の墓石を貽せり。識者吾足齋を評さく。寧
成の浮落る彼身辛酸无四郎ハ時親ふ仕へて孝ふ君ふ仕へ
て忠ふ周防へ使節を奉りふ色を貪り慾を恣ふして阿夏母
子を相携へて帰洛ふ其子を棄其母を俱して舊里信夫
ふかへるふ及びて父の憂ふ値ふ敢ふ滋酒の驕奢ふ財
用足ねば人の孤女を養とりて又其色を衒欲しをさ
詭詐を行ふ及び事敗ぶ追放せらぶ近江ふ流寓ふ時女児晩
稲の忠疱の良薬を織る折人の爭ふ金を偷て石を其財嚢ふ入

易〳〵に遠謀あるに似たれども罪其石より重きを知らざる古語所云両虎肉を爭ふ時狐其虚に乗るとの者是と其後妻の子とけ朱之伏の為より枸神を汲て晩稲の悪心癒たれども約を変じて朱之伏に其價の百金を取せざる老芋ぐるま実を破るに及びて是より後安〳〵と思へり是故に災害蕭牆の内より起りて罪なき晩稲に命を隕し彼身に盗児盆九郎に刺されて命終る時其隠慝を懺悔あるに柳又遲〳〵ぞや世に權威ある奸佞者の忠臣を寃げ善人を屠或に山豪海賊の人を殺せと草の如く財貨を奪ひ飽とるを人見て悪むべきの者の〳〵単辛踏吾足の如きうち見に然る悪虐の〳〵其心術を推時に狼賊狗盗と是一般なるを以て天公饒さざる竟に滅族の祟あり世ふにの境界に迷ふ者比々として皆是〳〵斗が中に晩稲の如きに浮薄の親に從ひるぐ〳〵其心親に似ざる者

志賀父政賢と婚姻の永人あり〳〵より閨門を固くして朱之伏の挑を容さざるよく養父母に相仕へて毫も怨なるとの者に非命に早く逝にしに善悪応報無差別に似たれども然るに善男善女も其君父不仁不義なる時に共に禍を免さざる便是蓬の中に生出る麻の直なるが如く人の鎌児を免さざるが如し〳〵遮莫其死後に至りて人其善を相稱其節操を嘆唱を死して悪名を貽者と雲壤の差あり古語に云虎に死して皮を留め人に死して名を留む名に二あり善と悪とのを慎べきなり

いひけるに言早く流布きけば志賀父政賢人なりて悄地に父政朝に告ていふ吾足の女児晩稲の如きに親ゆも兄ゆも似ざるものと其故に箇様〳〵と件の批評を證据ゆを政朝是をうち咲て感嘆幾度〳〵他が命運落ると其苦節を憐て彼山院へ妻く布施して晩稲の為に経を讀ませ悄

地ふ追薦の志を致しゆ。間話休題。介程ふ十三屋九四郎ハ彼夜艾辛踏の宿所ゑて四郎、楽六ふ對面の後第三日ふ至りて彼主僕の旅宿せ。高嶋生を訪まゝ思ひて湯浴し結髪させて且衣裳を整て。四摠ふ些の土産を齎して旅宿津向屋を出ぬまくるる程ふ忽地高嶋の奴隷索れ来て主の消息を口上閲を是則石見双ぐ九四郎を請迎る使るりけるべ。九四郎隨即其使を案内ふして四摠を俱して高嶋の宿所ふ来ふけるべ。彼家の老僕出向へて客房ふ請待ち主人ハ猛可ふ君所へ召れて僅方出仕して必程なく帰宅をべし。先和子達ふ對面あるべうもやとそ。杜四郎等ぐ常ふ居る彼一室ふ案内して看茶の禮細やこ四摠る客房ふ呼登されて。九四郎ぐ主人ふ贈る土産幾種を老僕某ふ渡しゑど。当下杜四郎楽六ハ遽しゝ九四郎を上坐ふ請薦めて寒暖を舒ぶ志る元を祝し

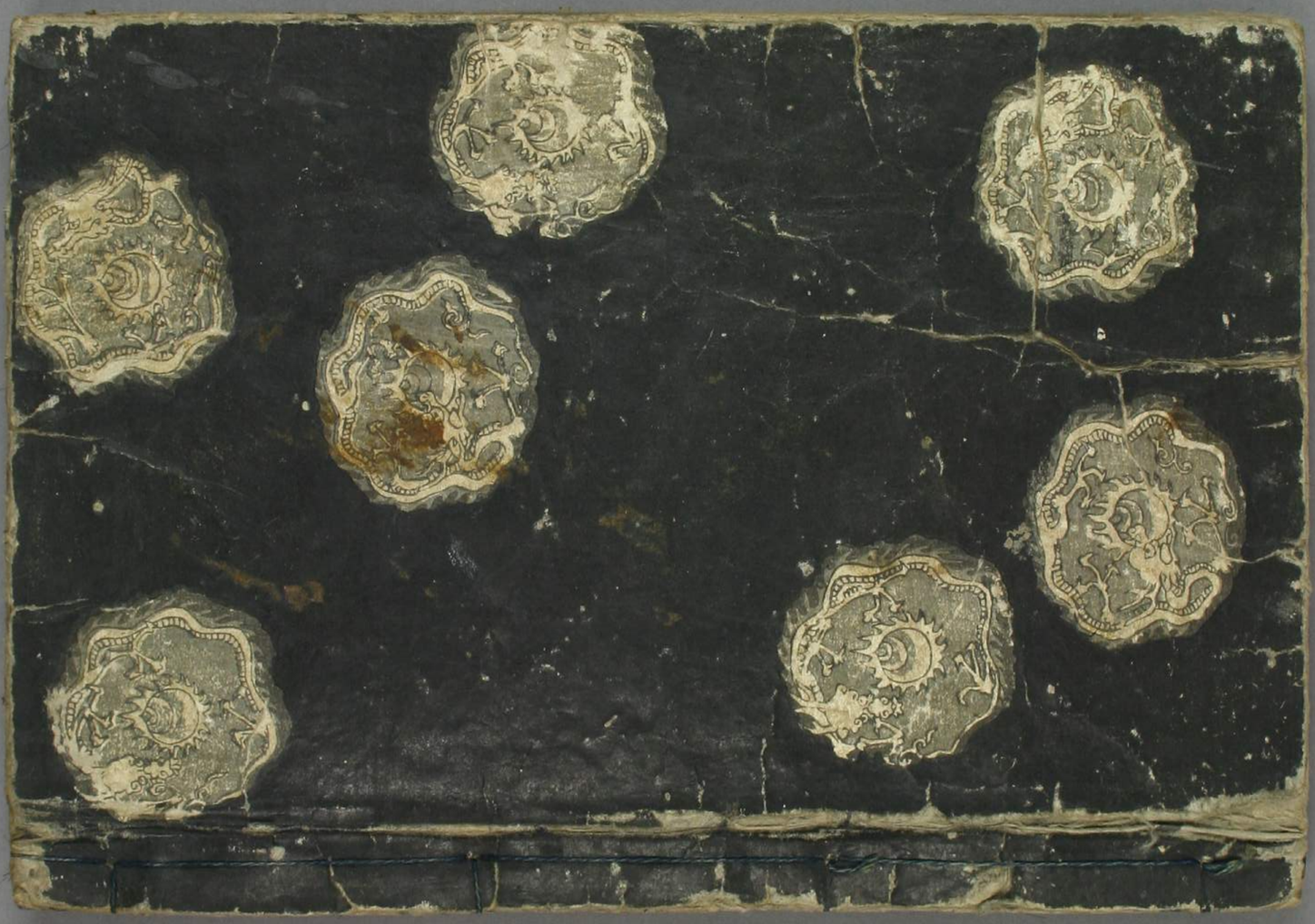
祝されて。然而前夜の盗賊金九郎ハ石見双計ひて有司ふ牽渡ゑ。射て禁獄せれしゆ。是ふより大江家伝の刀子をとり復しける。の顛末又國守佐々木殿杜四郎楽六郎を懇望のあまり云云の美禄を食せて家臣ふ做さまゝ欲しゆ。ふを固く辭ひまつりし上へ速ふ立去るべ元を彼刀子の故をもて逗留今ふ及ぶとの密話を九四郎ら。て。开ハ已亘元ゆるれども。既ふ仕を辭ひゆ。猶其城内ふ逗留せべ人の議誚もあるべ元欤事の宜元ふあゝざれば。彼金九郎の罪定りて一件都着落せば早ゝ立去りのゝ。咱等這回和君等の迹を追て這頭へ来ゆる。い別義ふあゝ。来春ハ亦講伏計ふ誘引て嚴嶋ゑる。辯財天ふ參詣もべう思ふ。然ば治比ふ立よりて大人弘元をの安否を訪まゝ欲を四郎腋子ハ志の折をもて大人と両舅兄御音就基ふ自筆の消息をまゐらせく。

九四郎を請待して
石見屋師恩を
答ふ
石見の屋
をさえん
ミよし




九四郎
ミよし四郎
ミよし大

添るに花押印鑑をもてしのべ異日浮浪の倭傑に相逢ふて奪れて治
比へ紹介して彼地へ遣しなるも大人と舎兄達と和君の手迹をいまだ
認らざれば花押正印だも知らで在ば必疑ひ思われて事の障りになりぬべし。
這義を告稟まんとて遠きを厭はで来ぬるに柴六も尓きてゐて呈書をもて
前恵を謝し奉らざいあるべからざ唱等ハ猶二三日の程ハ津岡屋に止宿せん。
宜く書翰を整へて那首へ遣しぬべし。曩に知らまし情由なれバ。いぬる
比乙藝ハ六市を従へさせく。大和の上市へ遣しぬ。落葉の刀自を慰んとて
あり。然バ住吉の櫛店ハ六市の小母夫なる。世話以夫婦を召よりて他等に
預け置るれバ那首のうへハ後安かり我身ハ刀自落葉の請ふに儘せて。明
年の比彼地に到りて杣木の家事を資ん欲いまだ思ひ定ら祢ども異日の
便宜に由るべきのミ豫もいひしるすなれ。和君等ハ尚弱冠なれ。萬里の逆
旅に光陰を送らバ去向ハ都敵地なり。笑の中にも刃あり。飯の中にも
鍼あるものなるぞ。儻にも刀子を失ひしも敵地を忘れて怠慢の隙ありし故
なるべし。然バ只小心を宗として戈藝に誇るべからざ其己に勝まるを憎むハ小
人の心之。和君等ハ兼和のうへなれバ九四郎なんどが博士態なる。意見ハ孔子に
語道に似たれど鄙語なりとて外視ハ目離妻の明も其背をみづから見がたきを
のえ悟るべし。柴六もよく記臆して主僕迭に足らざるを補ひあはなく後安かるべし。這
義をな忘れそといふ教訓叮嚀なりけれバ柴六ハいふもさらなり杜四郎歓び兼て
其議に據らざといふ者なく。猶閑談に及ぶ程に以前の老僕出で来て九四郎
等に告るやう主人帰宅仕りぬ。和子達も共倶に議這方へと先に立て在奥なる
一室に案内をまねる程に杜四郎柴六も九四郎の後方に立て儻の席に着
る時石見以出迎へて九四郎等を客坐に請ふて族の口誼言訖とバ若黨煎茶

を薦めるべき也。當下九四郎のいへなり。前夜より不慮のつゆ。殊ハ鄙陋の為
体迚卒爾ハ拜見仕り一後。今日一日も芳館ハ伺候せんとて旅宿を出立ち去
ぬる折ふし使をのゝりて拜門遅滞の罪を詫さう知又杜四郎栄六等ハ其旨縁の義
ハ伏りて貴所ハ投宿をこそ一より。滝留三四十日ハ及ぶべ。在下まで歓び思ふ
幸是ハ優も者の一。とのゝを石見ハ空もあ。た否とよ我身ハ一時峯張先
生ハ負爰一て教ふ月の恩浅ゝ一ハ一さび紋袴ハ撃れ一より。疎潤ハ意ハ
背紀一ハ遠回両氏子ハ話れ一べ了得ハ昔偲ぶ師恩萬分の一ハ答ふ紀。
折をゝ一と思ふのゝ。微禄歎待ハ置一と汗顔の外ハ也。知殿ハ訪
きんとハ思ひ一ハ幸ゝ一で薄酒を薦めもと思ふ請迎へ一ハ猛ハ仕り故
をゝ意外の無礼ハ及ぶ一とハ言ゝ話ぶ一で又巻を續ぐハ至れり。自餘ハ下回ハ解ふ。

新局玉石童子訓巻之十四終 村田